新板

異見佛法

いろはうた三番ばけ

さくらいとんや町のさ屋

十一編書

波5
1341

341

いりあひのかねのみなりけりくもひけれど
わがみくるくるさくはひくるる
のちこそうきよのみゝのたからなり
いのちをみければたかくるきなり
いやこそをいでゝみのりをきけよう
ちんくゝかこけはみるくたくさき
ろうぎんのやくめをつとめたうふに
みらいぎやうぶつたゝをとめよ
ろくちんをはぶくむこころまこくなり
こゝにそのみをうかみこそすれ
ろくだくのちきさのまゝひるのゆへぞ
こゝろにごりてみちはやみるり
はらゝべきこゝろのくをりみりけり
めゝかくゝのぎひのまゝには

はらたてゝせんのきをのくまろひくハ
たつ爪きこゝとはらはたゝじや
はつくをハめいごのみちへをちゆくなよ
ごくそたるらでしうけこりてるゝ
にんげんはよきだゝぎやうこむすぶ爪
あさふまずをぼよをぎみるにゝと
にんげんハわれひくゝとにまんきあり
がまんをすてゝよきゝくれたゝ
にくいひはたれにかぎらすせぬをのゝ
わがみつめりてくきれゝ
ほゝけとはるゝをろさうてをすべし
とがるきもゆをやゝがゝとけるらん
ほゝけふはこゝろがるゝみがたゝふゝ
みゝとゝろゝとわはけていゝれず

ほふかいをたゝいちはんとみるときは
ちりゝさいりゝかいぜぶりゝ
へんぎゝをやめてゝろをひくすじに
たゝうけたゝをてゝふじのだいをく
へけらへばゝをゝをもぬこゝとゝをのぎく
おゝをゝをりゝがまゝこゝとなりけり
へいぜひにたゝみゝこゝろをゝをすゝこゝを
アんぎゝにおゝびいちゝ祈んほゝき
ゝこゝをゝをたゝはゝてゝをあきゝてゝをだいをくを
ゝくゝこゝをゝこゝはゝみゝらゝぎゝぶり
ゝくゝせいにゝくゝすゝをひゝくゝはゝこゝでゝるゝ
てんのだゝをゝばかゝゝむゝるひゝとゝる
ゝこゝゝれゝばゝむゝぎゝゝのゝをゝきゝちゝかゝくゝるゝを
ゝちゝやゝくゝせんゝるゝにゝみゝゝをひゝまれゝ

ちゝにふかうのみたてかみをとり
たすけたまへくりものぞおかしき
ちゝそのかんのちらざほそのひくは
ゆくすゑあしきものとこころゑ
ちゑこそはそのみそぐほことしくるり
ちゑのかりみをときくくみがけ
りつきんをせつくおをばかせげたく
こころのこまにたづるゆほする
りひをまけみのおこなひをすほひくは
てんのめぐみをうくほひくる
りきやうあほかみやかけはいづくにや
こころのかまけりきやこれある
ぬきびくのひほ稲するみをあてがあほ
よほのかぜぎをかんとするなり

ぬきびくのこころにそうたてけれ
わがいちめいをぐくみほなり
ぬきむあくとんよくふくうけそば
たくおしこめくよるくのだいをく
るいをなきふじのだいをくたをうひを
これぞまことのかけりきり
るすのまふあくをつくほなたれそを
てんふはまるこかべよみゝあり
るいのなきちそうすほをのおよをするる
たがひふこころをつくことをすれ
ちいのやまかりびくことはきさらぬど
いづくゑきはおちてゆくらん
をんどくをきはくざるをのたるのきは
わがみふきりをたるこそうる

をやようをるとたいせんふおとふひく
ぞゆんでハるきゝそこれハぎやくゝるり
わすれてをふゝうやけをらんたれそをを
ひのおんぞくをおをひぞせよ
われゝをかみををうやまへゝれそをを
おををよハるゝけかくゝるをろをり
われひとりゆきゝるばみちをあやうきよ
たのみしゝのだいをくをつれ
かりをものをかゝしてゆくぞあくせゝい
ゝろきゝろゝとばかゝすゝるゝみ
かゝゝきをゆぐゝるゝしてかせげたく
かぜぐふつけてゝみハきてゝるぞ
か紙をそハおのづゝくひとゝみあがめられ
をたゝばかゝてゝみをぐりゝをすれ

よのゝゝをかんじてみれハつきゝげ乃
みぐゝゝみづにかげハうつらず
よきゝをおをひたつゝそぜんぞんよ
ぜんをゝゝすれはあくハゝりぞく
よそゝゆゝゝきゝをいひおけたれそを
かゝをゝぬやゝみハうびみやほため
たれそをぶゝぐゝかゝハみすれとを
ゝゝろのうちみはをりみまゝそよ
たぐいるきおやのちんぞくゝるひせは
このよのねがひかゝるいそすれ
たまゝくにゝたるきやくぞんあほゝきは
ふくゝそこるゝにちゝせよゝ
れきぜんにあくをつゝれハくをまゝすに
あくをばすてゝぜんみをとづけ

れきくのひくハぜろんにあてけれど
おびひあぶひとハこれハすくみ
れんれんとたるみのいろをたづねきて
いまうをみつをむしのちんぎん
うむるとをこころのうちをすみぞんに
こころものいろハらみをかくまを
うつしまはをのハいとれぬことたどこて
こりかるすこてうぬをのをり
うハたくひとをすむるやくなれハ
かゝりおごりハいらぬをのり
つくくくうきよのるをあをふよハ
さごまるこをハなきくきれたく
つ祢くあつるつこがゆずきれず
そのあくゑんををらふたいをく

四

つれくとかうきるあくすれとそのひをは
身はあをるでくちるそきやるる
ねんうをきやうづるこくハさめやらず
ひとのいけんハたうざをうく
ねごふごせられひくこをもみまいれぞを
こころゆがめはやくみたくぬぞ
ねるをそをこころをつけてねるをのぶく
うひくあうつきゑんやうるぞ
なるごをこをさわるしをあをうび
かるらぬむうきるぬゆくする
ぶがくへてこくハたれこそを
ゆこけのみのりきくがこくるり
なにこをこをゆめのうきよときりるく
るをとをうくとあをひけるる

五

らいせをいみちきまくのちみときく
たくひとくすじふたのむごくらく
らくをせばうきよのことをふりすてく
みらいぎやうぐんろうとれぞあんらく
らちもうまいたくぐうりいつひくは
ひとりがあるごとあつたしるあ
むくいごくよしあしことあきさきのの
ぜんあくふくろのごるこくみし
むりりをばおりよりうりてはこくを家
のちのつまりはそんくみゆうぞ
むつしみしひくはむるくみりよをり
みのゆくすをとそのみたのまん
うつくまもちんをたのめひくくよ
かうみハなきてむ祢乃うちより

うれしきはたてごとらくとおもへどし
かるべきことくはこれいだごくよ
うりものはかいてをきあたてまつれ
い糸はいのあふまはけようりかと
なくうびをもひさごめてかるからん
かとうぬやうふうろてくう
ねつまてをるがへ屋をくおもふゆへ
まことくのまんハおうこらざりけり
ねきながくむけんよおつほひをあり
こてろのあがゑとハせむるぞ
のべまてとおうしひくふありけれと
のべうりきはひとうりそゆけ
のりものをかんじてみまはだいをくよ
まうしのうみをわすうのなり

のりゆけばさきはちかくてあとみへぬ
たちかへることうぬをのなり
れさばわせさきだつふのなり
のちおかぜあくはまうまる
れひゆけハうれひかさうたぶ、し
よハうたやまあきのをこぶば
たごるをのひさしかぶぞくあをえべし
かるびいをやぶほをうあり
くれるひをうちすておけばいろさむほ
たびくそめてたんのいろませ
くうせかいるがくのべてるあうせん
けうあすハまうくるをを
くうをいでハくにかへるなり
とかくだいしはこのようなりけり

やまたかさふりきさうみにやきづむみを
たのみてうかめゐじのだいをく
やすてくうみこれをにきんとあをつべし
いかごとしそこりはこころられば
やうをなきうきよのせをたれそそを
やう称ばうゐをものとこころく
まてきだしこのよはろづりりやみを
らいせはあがのうびときれた
まつごゐはたふりすてよきまくを
みらいみやげはだいをくとれ
まん称んとつみうをゐくたかくを乃
きてふてびみぬぞうるき
げんぜをばいのりひとのをせくして
ぞひこてろるきゝみらいがきだう

けちをんまこころゐかけてぜんとるを
ぜんのみをとくやとけるら
けさきてひかげをきゐあさがやの
をれのるれやひとのおをかげ
ふりそるわめゐはゐぞてゐけれぞを
うるくさ木はおのがちるく
ふくうくを称ごゐふはたれをあるごと
みのおこるひでふくはきくるぞ
ふしぎるゐをものはせけんゐあくけれぞ
るををふうぞはめくるをのう
こころそめくるをものにてありければ
ごせを称がくぐめくとたつこゐ
こころゐハうゐをのことをおをふとくを
ひとのわくきをいくぬをのり

こくごをばあぐるあをのくもをふるよ
あれだんをつのあやくもれたく
ゐいをぜずるがきうきよをわんじるよ
ぐちるほひくのこころもうるき
ゐたるうてたいまくするるたれうてを
みあやまひをばつくるほをのうる
ゐひぐをとはさうゆるるれのひとあれば
ふくこうく　称ごうはこれをこうう
てきのるうひのるのぐれいづるくを
ひうろのかぜはゐげをるずや
てまへうろづにこころをつけたまへ
ゆきあうてはよげはるらぬぞ
てのうちあれをのまるぬひくそは
うちでのとづちまるぬ人れり

あくまんのそのつうりをハかんずるに
ちごくのくげんいうでのぐれん
あくにんのつくほつみとがかうだい　み
ちごくのかあのうきけとるるらん
あらためてうきまいくるばろうをを
ぞうをちぐかほこくはあらじる
さきまるくがむくいきるくおとうずハ
あるとこのようをうりやうろ爲き
さりゆくくわくにうをのこするく
これぞめいどのぎやまふるうん
さぐめるきゆめのうきにゆめをみて
ゆめをゆめくはおをはぎりきり
きめふみしひくはくきけハむぞくのく
けふはけふうくるぐたうるき

きくことをこころとつけてきくものぞ
ひとのいふことをきくれがあるん
きけばこそのぞみをもこれをたてて
こしらうてこそとしきりぬをまこと
ゆくべきとまろせばあしくまろらん
さとりてみれハざるてゐるごと
ゆめのよにあるかうへのびていまこそは
さんぜをさとほみとはあるらん
ゆくすゑをこうきやくみまをるひとそは
これぞまむとのみちくもれたる
めのまへみたかうとかさるをつひとは
うらやましむるみさきのうきたるを
めゐみるくこころをつけてみほを乃ぞ
あしきこころはもやくもりぞけ

めいどをみちひろしとはそもそを
ぐちるるひとはみちをゐきをの
みのうちのあくの氷をとくはゐみそ
つきひのひかりめじのだをく
みるゐつけきくゐつけてをものぐを
うちぞゐすほをひとはうちをゐ
みのとがをさんげすほひとつみあきし
ふりくつむはおうをきうみゐり
しのくめのかのくあけてうくまで
ぜんはおこらずあくハかさるほ
しまほうとを者をまつぐいゐのうあけ
そのすゑくとしいごをたしゐめ
しるひとはいつくゐありてをうきをものぞ
これぞたきしのゐんといふまり

ゐてなこてきてたをつはたれそを
おのがかりてよみそをるゐ
ゐひぞをりみのおてるいがみだらにて
ひとくのそしりをかりきるずく
ゐんのみちりわしきをのうたれそを
さうちふせぐふつまををとむる
ひとごとよひとのいけんでおりしけれ
わがみをだよをおさめかの○つく
ひとちくずゐれをりたるくおそるゐよ
たまをおそひはおなじこそをり
ひる称すゐひくのそろをかんずるゐ
ぜんごをちくぬうつけをのをり
もへゐるがゐんのつれをうちゐれよ
ゐじのだいをしくかるゐづちよして

ものいくよきこてだりてをのぞ
きゐかけるこくいたぬをのをり
ものゐはころゐみりてかをゐ屋し
ところかゐれだををかくるをり
せゐをたくおろくおくるゐ乃
うぞんこじんのてん毛をりをり
せいだせばみゐそれくゐこくを毛ゐ
いくづくそのハひくくいくらへ
せけんゐはゐきくくいくをあるをのぞ
みゐそれくゐうけてながせる
すゐくのゐろきのさうをかんずゐ
これぞまこくのころをりをり
すくゐゆけまろへまかるゐたれそを
だいのちりこそまをゐをのをり

すめばよしすまぬときみはうめごとも
ひとのひちんみちのふがいやるう
けふだいはうをとくみづとのことくにて
なゝよくすればひとくそかむる
きやうがいをすてゝ祢ごゝろこゝろあな
ぶつがくみすぎるまるりう
けうくのそのたまひしハゐもとのを
それこそこれよ南無妙法蓮華経

宝永六歳巳丑九月旨

堺紙屋町野田屋宗隆作之